

混住型学生宿舎の計画と運営に関する研究

—スーパーグローバル大学創成支援採択大学の先導的事例を対象として—

Study on Planning and Management of Mixed Residents-type Dormitories
- Focusing on Leading Examples of Top Global Universities in Japan -

○吉田千春^{*1}, 田中友章^{*2}, 飯田捷^{*3}

YOSHIDA Chiharu, TANAKA Tomoaki, IIDA Sho

This study focuses on mixed dormitories where foreign and Japanese students co-reside, aiming to illustrate two perspectives, “composition of private/common living space” and “managerial practices involving RAs”. The survey took place at seven leading universities among 37 Top Global Universities in Japan. It has been observed that there exist diverse dormitory types, building plans, and clustering methods. The authors argue that specialists and resident assistants play crucial role in securing successful management of mixed dormitories and promoting their value as educational spaces. It is thus necessary to design mixed dormitories with two concepts in mind – “Education and Learning” and “Management”.

キーワード：混住型学生宿舎, 集住環境, 学びの場, 教育寮

Keywords: Mixed Residents-type Dormitory, Communal Living Environment, Learning Space, Dormitory for Learning Environment

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

現在、大学の国際化が急速に進展し、多様な留学生の受け入れをはじめ、国際的な学びの環境作りが求められている。中でも、混住型学生宿舎（以下、混住寮）は国内でグローバル人材を育成する場として注目を集めている^{*1}。2014年度の「スーパーグローバル大学創成支援事業（以下、SGU）」（文部科学省）においても、混住寮の有無が採用基準に挙げられており、新設計画が増加し、各大学は構想調書に基づく取組を推進している。

現状の学生宿舎は、混住することを前提に計画されたものはまだ少なく、単に物理的に混住させるだけで、教育の観点からしっかりと計画/設計された寮はほとんどない。また、学生宿舎に関する研究は、建築学分野では、留学生宿舎の研究が中心に行われており、留学生宿舎の提供の現状を扱った鈴木の研究^{*2}、施設と都市や地域など外部との関係に着目した中摩らの研究^{*3}などが挙げ

られるが、混住寮に焦点をあてた研究はほとんどない。教育学および社会学分野では、混住寮に関する研究は、日本人学生と留学生の人間関係構築に焦点を当てた研究が中心で、横田・田中の研究^{*4}、出口・八島の研究^{*5}、山川の研究^{*6}などがある。また、国際寮が有する社会教育的機能に着目した政宗の研究^{*7}、混住寮のレジデント・アシスタント（以下、RA）に着目した中村らの研究^{*8}、吉田の研究^{*9}などが挙げられる。しかし、混住寮の学びや教育的意義に焦点を当てた研究は少なく、建築学と教育学の双方を結びつけた研究はまだ見られない。

以上の背景を踏まえ、留学生と日本人学生が共に生活する混住寮について、教育的効果の高い運営方法と建築計画の手法の探求を視野に入れて、本研究では、大学の混住寮の現状と先導的な事例を調べ、「居室と共用部の空間構成」と「RAなどを活用した運営上の工夫」の2つの観点について特徴を明らかにすることを目的とする。

*1 明治大学大学院国際日本学研究所, 博士後期課程

*2 明治大学理工学部建築学科, 教授, 博士(建築学)

*3 明治大学大学院理工学研究科建築学専攻, 博士前期課程

*1 Graduate Student, Graduate school of Global Japanese Studies, Meiji University

*2 Professor, Department of Architecture, School of Science and Technology, Meiji University, D.Arch.

*3 Graduate Student, Department of Architecture, Graduate School of Science and Technology, Meiji University

1.2 研究の対象と方法

本研究の対象はSGU採択大学37校とし、その中より混住寮の提供に積極的かつ先導的な大学を主な対象とする。本論においては、第一に、SGU採択大学37校を「構想調書」に基づき整理し、混住寮の現状の把握と課題の抽出を行なった。第二に、その中から先導的な事例として7校を取り上げ、実地調査および担当者へのヒアリング調査を実施した。そして、調査結果と収集した資料に基づいて諸元を整理した上で、平面図に見られる「居室と共用部の空間構成」の特徴を比較した。第三に、先導的な事例7校の中から、特にRAの活用を積極的に行っている2校を取り上げ、ヒアリング調査を行って「RAなどを活用した運営上の工夫」の特徴を抽出・整理した。

2. SGUの「構想調書」に見られる混住寮の現状

SGUは平成26年に公募採択が行われ、国際競争力の強化に取り組む大学の教育環境の整備支援を目的とし、国公立大学37校が公募採択された。世界大学ランキングトップ100を目指す大学を対象としたタイプA(トップ型)13校と、グローバル化を牽引する大学を対象としたタイプB(グローバル化牽引型)24校より構成されてい

表1 SGU採択大学37校における混住寮の特徴

大学名	H25 総学生数 (人)	学 部 数	混住寮に住む 留学生数/日 本人学生数 (H26)	混住寮の設置状況
タイプA				
A.北海道大学	17844	12	153/688	日本人向けの寮を混住型としている。また、H22に女子専用8人ユニットの混住寮を開設。
A.東北大学	17852	10	158/303	H19に8人ユニットの混住寮、H25に2つの混住寮を開設。学びの場として取組を実施。
A.筑波大学	16422	9	962/1898	創業当初から実質的に全て混住寮。今後「グローバルレジデンス戦略的整備構想」を実現。
A.東京大学	26572	10	257/625	2つの学生宿舎は3割(287室)が外国人留学生が居住する混住型。
A.東京医科 歯科大学	1619	3	21/89	留学生が入居できる4つの宿舎のうち、3つは混住型。
A.東京工業大 学	6308	3	161/74	11の学生宿舎のうち、6つの寮が混住型。
A.名古屋大学	16583	9	105/235	H14年建築の寮(292室中60室が留学生入居枠)とH23年に完成した寮は混住。
A.京都大学	22908	10	92/531	4ヶ所の学生寄宿舎は入寮者を日本人学生に限定していないため、実態としては混住。
A.大阪大学	23429	11	29/116	今後、外国人・日本人の混住を前提とした2,600戸規模のグローバル・ビレッジを整備予定。
A.広島大学	14163	11	142/452	留学生の7割弱が混住型宿舎に既に居住。学生同士の交流のための様々なイベントを実施
A.九州大学	18799	11	111/328	2つの混住型宿舎に加え、留学生と日本人が4人ユニットで住む寮と半数を留学生が住む宿舎をH26に開設。
A.慶應大学	33681	10	191/555	現在4つの混住型宿舎を保有。学生宿舎の発展型となる滞在型教育施設「未来創造塾」を建設予定。
A.早稲田大学	53574	12	549/989	既存の直営寮、提携寮のほとんどが混住型。H26に首都圏最大で定員の半分は留学生の「WISH」を開設。
タイプB				
B.千葉大学	13663	10	0/0	平成28年、30年にシェアハウスタイプを基本とした混住寮を竣工予定。
B.東京外語大 学	3440	3	57/167	H25に混住型の国際交流会館3号館を開設。
B.東京藝術大 学	3220	2	2/146	H26に混住寮「藝心寮(総戸数300戸)」を開設。

る。37大学の「構想調書」をまとめた概要は表1の通りである。「構想調書」によると、混住寮の提供については、ほぼ全大学が、「混住寮の新設」、「既存の宿舎の混住型への転換」、「既存の混住寮の定員数の拡大」の3つのいずれかを計画案として挙げており、今後SGU事業の進展に伴い、各校で混住寮の設置が増加すると考えられる。

また、37校の構想調書から、混住寮の取組の現状について次の3つの特徴が見られた。第一に、寮によって、混住寮に住む日本人学生と留学生の割合に幅があることである。留学生宿舎に数名の日本人学生が居住している寮から日本人学生と留学生が約半数の割合で居住している寮まで様々なタイプが存在し、採択校により「混住」の定義に相当のバラツキがあり、まだ定義が十分に定位されていないことが分かった。第二に、大学の規模によらず、多様な種類の居室タイプがみられたことである。現在、混住寮の居室タイプとしては、個室タイプ、ルームシェアタイプ、ユニットタイプの3種類が主であるが、特にユニットタイプにおいて、1ユニットあたりの人数に幅(3~8人)があることが分かった。第三に、「今後の取組」の記述において、様々な教育的可能性を目指す構想が存在し、特にRAの活用について多くの活用の方向

大学名	H25 総学生数 (人)	学 部 数	混住寮に住む 留学生数/日 本人学生数 (H26)	混住寮の設置状況
B.長岡技術科 学大学	2332	1	86/405	現在、5つの学生宿舎を全て混住化。
B.金沢大学	10251	10	151/35	H24にシェアハウス型(留6、日2)の留学生宿舎を新設。
B.豊橋技術科 学大学	2188	1	39/538	H26から混住寮入居のための日本語力による制限をやめた。
B.京都工芸織 維大学	4054	1	64/5	H25に他大学の留学生とも交流ができる混住施設を竣工。
B.奈良先端科学 技術大学院大学	1034	1	134/409	開学以来、全619戸全て混住型。
B.岡山大学	13115	11	4/2	H25より国際交流会館を混住寮に変更。
B.熊本大学	10152	7	1/250	H28より留学生宿舎を混住型宿舎へ変更。
B.国際教養大 学	922	1	140/627	学生寮1つと学生アパート4つは開学時より全て混住。
B.会津大学	1082	1	20/67	H23よりグローバル化の取り組みとして混住寮を設置。
B.国際基督教 大学	2918	1	69/438	開学当初から全ての寮が混住。グローバルハウスは4人ユニットで必ず留学生と居住。
B.芝浦工業大 学	8387	3	31/75	H25に国際交流の機能を持つ混住寮を新設。
B.上智大学	13263	9	134/94	H24に混住寮(教育寮)を開設。留学生の割合は3分の2。
B.東洋大学	29203	12	0/0	今後IESとの協定により、混住寮の共同開発を行う。
B.法政大学	28852	14	0/0	H27よりキャンパス向けの専用寮を整備。
B.明治大学	32270	10	32/105	H22から混住を実現。日本人110室、留学生35室。
B.立教大学	20902	10	73/236	3つの国際交流寮は全て混住。334室注98室が留学生用。
B.創価大学	8005	8	34/216	21の学生寮を保有。H26より混住寮は3寮体制。
B.国際大学	322	1	234/38	全寮制/各フロアに最低18カ国の学生が混住。
B.立命館大学	34861	13	160/15	H24年から教育寮として位置づけ。H27年に寮を新設予定。
B.関西学院大 学	24284	11	0/0	5人ユニット(1人留学生)の混住寮をH27に供用開始予定。
B.立命館アジ ア太平洋大学	5637	2	777/444	留学生は100%混住。教育寮としての役割。

性が記述されていた。37 校中 35 校の大学が、混住寮の今後の取組について、留学生の拡大に伴う居住空間の供給という目的以外に、混住寮を「国際交流や異文化理解を深める場」、「主体的な学びを育む場」、「グローバル人材を育成する場」などと捉えて運営する方針であることが記述されており、「教育寮」としての運営が意識されていることが分かった。

3. 先導的事例の調査

3.1 事例調査の概要

本調査の先導的事例として、7 校の混住寮を取り上げて実地調査を行った。7 校の調査概要は表 2 の通りである。これら 7 校の混住寮は、寮を単なる生活のための居住空間としてだけではなく、RA などを配置し、留学生との交流やグローバル人材の育成を目的の 1 つとして運営を行っている事例を抽出した。そして、寮の視察は全て担当者の案内のもとで実施した。また、九州大学を除く 6 校においては、寮の視察と合わせて、寮の運営上の工夫などを中心に担当者へのヒアリングを実施した。

表 2 調査概要

大学名	寮の名称	訪問日	ヒアリングの有無 ／ヒアリング時間
九州大学	①ドミトリー 3 ②伊都協奏館	2014 年 9 月	無
早稲田大学	国際学生寮 WISH	2015 年 5 月	有／約 30 分
金沢大学	先魁	2015 年 2 月	有／約 60 分
国際教養大学	①こまち寮 ②さくらヴィレッジ	2015 年 2 月	有／約 60 分
国際基督教大学	①グローバルハウス ②樺寮	2015 年 7 月	有／約 60 分
芝浦工業大学	国際学生寮	2013 年 9 月	有／約 30 分
立命館アジア太平洋大学	①AP ハウス I ②AP ハウス II	2014 年 9 月	有／約 60 分

3.2 事例調査の結果

7 校の大学において、大学が所有する 11 の混住寮を視察した。調査結果の概要は表 3^{注1)注2)}の通りである。加えて、ヒアリングの結果を合わせて報告するが、複数の寮を視察した大学においては、設置年が新しい事例を取り上げ、その概要を詳述する。

1) 事例調査 1 「ドミトリー 3」(九州大学)

九州大学は 1911 年に設置された福岡県に立地する国立大学で、「教育の質を国際的に保証するとともに、常に未来の課題に挑戦する活力に満ちた最高水準の研究・教育拠点となる」を基本理念としている。

本事例は伊都キャンパスから徒歩 5 分程度の所に隣接

された 5 階建の寮である。4 人を 1 つのユニットとし、中庭を囲んだ形で各階は 8 ユニット (32 人) で構成されている^{注3)}。また、2 つのユニットが共有して使用するバルコニーがあり、そこにはテーブルと椅子が設置されており、8 人単位での交流を促す仕組みになっている。1 階には多目的室、建物の外にはバーベキューが可能な設備が備えられている。

2) 事例調査 2 「国際学生寮 WISH」(早稲田大学)

早稲田大学は 1920 年に設置された東京都市圏に立地する私立大学で、世界の教育、世界の研究をリードする“Waseda”を作り上げることを目指している。

本事例は、グローバルリーダーを養成するためには大規模学生寮が必要であるとの認識から、キャンパスに近い場所に土地探しから行き、建設された。11 階建の建物の 2 階から 11 階が学生寮になっており、1 階は生涯学習の教育施設(「早稲田大学エクステンションセンター中野校」)として地域に開かれた施設になっている。

居室は 4 人を一組としたユニットタイプで、個室とリビングで構成されている。各ユニットのリビングは、廊下側がガラス張りになっており、廊下からリビングの様子が見えるようになっている。これにより、リビングスペースが学生相互に開かれた場として設計されている。

1 つのフロアは 95 名の学生が居住しており、各フロアには、共用のキッチン、ダイニングスペース、トイレ、シャワーなどが設けられ、フロア単位のコミュニケーションも促進する。なお、フロアは男子専用のフロアと女子専用フロアに分かれており、エレベーターに乗る場所に男女別のセキュリティゲートが設けられている。2 階部分には、多目的室だけではなく、音楽室やフィットネスジムなどの設備が整えられており、寮での生活を楽しむことができるようになっている。

運営面では住み込みのハウスマスター、上級生の RA などを配置し、寮生活をサポートしている。

3) 事例調査 3 「先魁」(金沢大学)

金沢大学は 1949 年に設置された石川県に立地する国立大学で、世界に開かれた教育重視の研究大学の位置づけを持ち改革に取り組み、北陸さらには東アジアにおける知の拠点を目指している。

「先魁」は金沢キャンパスが移転したことにより、現存の宿舎からキャンパスまでの距離が遠くなることを考慮し、移転先の角間キャンパス内に新たに設置された。

建物は 6 棟で構成され、1 棟が男女共用、2 棟が男子宿

舎、3棟が女子宿舎である。宿舎の最大収容人数は104名で、8名を1つのユニットとした2階建のシェアハウスタイプが13戸あり2〜3戸で1棟の宿舎となっている。建物が1棟ではなく分棟配置になっていることが特徴である。建物は1階に共用LDKと水回りと3部屋の個室、2階に水回りと5室の個室という構成になっている。居住する8名の学生の内訳は6名が外国人留学生で、2名が日本人学生となっており、日本人学生は留学生の生活の補助や共同生活における運営を行うRAを務めることが入居条件として義務付けられている。また、事業面の特徴として民間の企業の資金で建設され、完成後に大学に所有権を移転した上で、事業者が維持管理・運営を行なうBTO方式サービス購入型で、事業者側は大学側が支払う家賃収入など（サービス対価割賦支払い）により事業費を回収する仕組みとなっており、管理は当該事業者が行なっている。なお、共用棟は大学が建設費を負担している。

4) 事例調査4「さくらヴィレッジ」(国際教養大学)

国際教養大学は2004年に設置された秋田県に立地する公立大学である。外国語の卓越したコミュニケーション

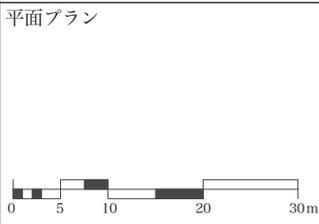
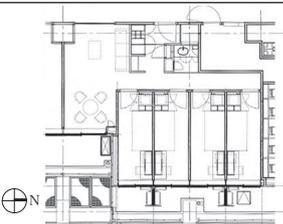
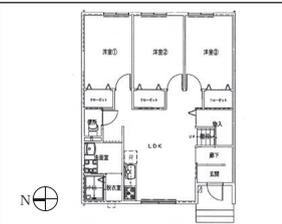
能力と豊かな教養、グローバルな視野を伴った専門知識を身につけた実践力のある人材を育成し、国際社会と地域社会に貢献することを使命としている。学内に1年生全員が入居する義務寮（「こまち寮」と、2年生以上が入居する3つの学生宿舎（「ユニバーシティヴィレッジ」、「グローバルヴィレッジ」、「さくらヴィレッジ」）を備えており、約90%の学生が学内に居住している。

本事例は2013年に竣工、運用が開始された大学で最も新しい学生宿舎である。それ以前の寮の居室は、1人用または2人用の個室タイプであったが、学年が上がるにつれ、シェアよりもプライバシーの高い個室空間を希望する声もあり、ユニットタイプとして設置した。3人のユニットにはできるだけ多様な背景の学生が組み合わせるように工夫されており、基本的には日本人学生2人、留学生1人の組み合わせになっている。

5) 事例調査5「樺寮」(国際基督教大学)

国際基督教大学は1953年に設置された東京都市圏に立地する私立大学である。リベラルアーツ・カレッジであり、世界基準の「全人教育」を教学方針としている。9つの寮の全てがキャンパス内に設置され、教育寮として

表3 事例調査の結果一覧(1〜3)注4)

大学名	1. 九州大学	2. 早稲田大学	3. 金沢大学
寮の名称	① ドミトリー3 ② 伊都協奏館	国際学生寮 WISH	先魁
設置年	① 2014年、② 2014年	2014年	2012年
事業主体	大学直営	大学直営	民間活用/BTO方式サービス購入型
所在地	福岡県福岡市	東京都中野区	石川県金沢市
場所	① キャンパス隣接、② キャンパス隣接	キャンパス外	キャンパス内
構造	① 鉄筋コンクリート造 5階建 ② 鉄筋コンクリート造 9階建	鉄筋コンクリート造 11階建 一部 鉄骨造・免震構造	軽量鉄骨造 2階建 (住居棟) 鉄骨造 1階建 (共用棟)
住戸タイプ	① ユニット (4人) ② 個室/ルームシェア (2人) /家族室	ユニット (4人)	ユニット (8人)
部屋面積	① 個室 7㎡ + 共用LDK 28㎡ ② 個室 17㎡、シェア (2人) 41㎡	個室 8.6㎡ + 共用ラウンジ等 32㎡	個室 8.5㎡ + 共用LDK 15㎡
最大収容人数	① 136人、② 601人	872人 (257室)	104人 (13ユニット)
平面プラン			
外観写真			

位置づけられている。2017年度には新たに2つの寮が開寮する予定である。

本事例の「樫寮」は2010年に設置された寮であり、教養学部にて在学する1、2年生を居住対象としている。3階建の寮の1階には男子、2・3階には女子が居住している。各階には数名の3年生が「コミュニティアシスタント」として居住し、寮生活をサポートしている。

「樫寮」の特徴は、各階の居住空間に「ポッド」と呼ばれる3つのまとまりのあるエリアが設けられていることである。各ポッドはシェアタイプ7室から構成され、最大14名が居住し、共有のトイレ、シャワールーム、洗面所などがある。各階には3つのポッドがシェアするキッチンと洗濯室、物干し場などが共用エリアに設けられている。1階には別途ラウンジとソーシャルルームが設けられており、寮生が集まる場として、ポッド/階/寮という3つの階層ごとに共用空間が設定されている。

セキュリティ面に配慮し、カードキーで入館等の全ての管理を行っており、原則、寮生及び寮生の家族以外が入館できない。各階の居住空間の入口にはドアが設けられており、その階の居住者以外は入れないシステムになっている。また、1階に管理人室と管理人住居があり、

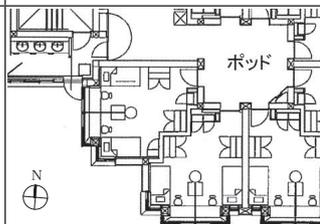
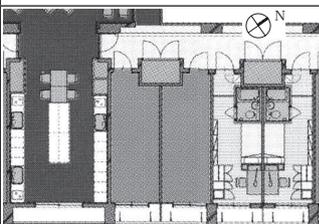
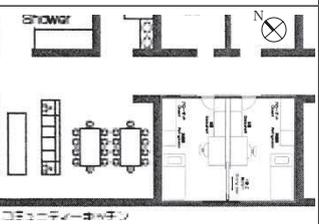
24時間体制でサポートしている。

6) 事例調査6 「国際学生寮」(芝浦工業大学)

芝浦工業大学は1949年に設置された東京都市圏に立地する私立大学である。理工系大学として、「世界に学び、世界に貢献する理工系人材の育成」を教育理念として、世界に通じる価値共創型教育の確立を目指している。そして、2013年3月に大宮キャンパスに国際学生寮を新設している。本事例は、留学生と遠距離出身者である日本人学生のための、収容定員約120名の学生寮であるとともに、国際交流の機能も併せもつ多目的施設として計画されている。

国際学生寮は2~5階の居室部分を3点式のユニットバスを備えるワンルームマンション型の個室タイプとしてプライベートな空間を確保しつつ、各階の中央部のEVから居室に至る経路に面して、1フロアの32居室が共用するシェアキッチンやコモントラースに面したコモナルームを設け、居住者間の日常的なコミュニケーションを創発する空間としている。加えて、1階部分には、学生グループが利用可能なミーティングルームや屋外の広場スペースに面して講演会など多目的な利用ができるグローバルプラザを設け、単なる居住用の学生寮ではない交流

表3 事例調査の結果一覧(4~7)

4. 国際教養大学	5. 国際基督教大学	6. 芝浦工業大学	7. 立命館アジア太平洋大学
① こまち寮 ② さくらヴィレッジ	① グローバルハウス ② 樫寮	国際学生寮	① APハウス I ② APハウス II (シェア棟を含む)
① 2004年、② 2013年	① 2001年、② 2010年	2013年	① 1999年、② 2000年
大学直営	大学直営	大学直営	大学直営
秋田県秋田市	東京都三鷹市	埼玉県さいたま市	大分県別府市
キャンパス内	キャンパス内	キャンパス隣接	キャンパス隣接
① 鉄筋コンクリート造4階建 ② 木造2階建	① 鉄筋コンクリート造4階建 ② 鉄筋コンクリート造3階建	鉄筋コンクリート造5階建	鉄筋コンクリート造5階建
① ルームシェア(2人) ② ユニット(3人)	① ユニット(4人) ② ルームシェア(2人)	個室(1階に研究者用家族ユニット)	① 個室 ② 個室/ルームシェア(2人)
① 個室14㎡ + 共用水回り ② 個室8.8㎡ + 共用LDK 29.1㎡	① 個室12㎡ + 共用 ② 個室25㎡	個室17㎡	個室タイプ13㎡ ルームシェアタイプ26㎡
① 184人、② 107人	① 68人、② 126人	120人	① 425人、② 個室477人+シェア378人
			
			

の場や学びの場としての性格をもつ施設として計画されている。

また、運営面では、各階に2名の大学院生をRAとして配置し、交流イベントの企画立案や月例の入居者によるフロアミーティングの実施などに当たっている。本事例では、管理運営会社が常駐の管理者として雇用した寮長夫妻がイタリア人と日本人のカップルであったため、日英2カ国語を含む他言語対応が出来る体制が構築されたという幸運にも恵まれ、学生課職員やRAとともに運営に当たっている。

7) 事例調査7「APハウス」(立命館アジア太平洋大学)

立命館アジア太平洋大学は2000年に設置された大分県に立地する私立大学である。「自由・平和・ヒューマニズム」、「国際相互理解」、「アジア太平洋の未来創造」を基本理念として、アジア太平洋地域の未来創造を担う人材の育成と新たな学問の創造を目指している。大学の寮としては、キャンパスに隣接する形で「APハウスⅠ」と「APハウスⅡ」があり、学外に「APハウスⅢ」がある。

APハウスは、大学設立を計画した時に「留学生の日本語」、「財政」、「留学生の住居」という3つの課題があり、その改善策の1つとして混住寮としての「APハウス」が設立された。留学生は1年次の入居が義務づけられている。日本人学生の入寮希望は多いが、入居できるのは希望者の半数程度である。寮の留学生と日本人学生の割合は留学生が66%、日本人学生が34%である(2013年3月現在)。APハウスはⅠとⅡに分かれており、各ハウスは3つの棟からなる。1999年、2000年に個室使用のAPハウスⅠ(425人)とAPハウスⅡ(477人)が建設され、2007年に引戸で部屋を仕切ったり接続したりできる住戸からなるシェア棟(189×2=378人)が建設された。各ハウスの1階部分はビリヤードや卓球台などの娯楽施設と畳のスペースなどを設けたコミュニケーションスペースとなっており、フロアごとにキッチンが設けられ、学生達の交流を促進する場となっている。

APハウスの特徴は寮担当の職員が複数いることである。現在、6名の専門の担当職員がRA担当、教育プログラム担当などに分かれて教育的意義のある寮をつくりあげている。また、寮の運営、プログラムの企画、RAの選考、RA研修などに、教員が携わっている部分もある。

4. RAなどを活用した運営上の工夫

次に、RAの運用に力を入れているという特色がある

「国際教養大学」、「立命館アジア太平洋大学」の2校を取り上げて、その運営面について報告する。

1) 国際教養大学

国際教養大学では、複数の寮を運営しているが、寮の教育プログラムとして特徴があるのは「こまち寮」である。「こまち寮」は大学の理念であるグローバルな社会・地域社会に貢献する人材を育成するため、1年生の義務寮として設置されている。仕切りなしのルームシェアで、7.5帖のスペースを2人で共有するため、限られたスペースでの共同生活はストレスやトラブルもあるが、最初にルームメイトとルームコントラクトを作ることで、トラブルを防ぐ、或いはトラブルを軽減することができている。また、国際教養大学では、1年間の留学が義務付けられており、どのような環境でも適応できる力を育成するためにも、1年次にはルームシェアを推奨している。

2014年度の「こまち寮」のRAは8人(寮生の総数240人)で、月に2万円(こまち寮1カ月の家賃相当)の補助を受けている。RAの選考は書類審査と面接の2段階で、英語と日本語のコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、1年間RA業務を継続できることを重視している。RAのほとんどは日本人学生であるが、学部や大学院の留学生が1~2人、RAとして参加することもある。

RA制度は2005年度から開始しているが、2013年度より大幅にプログラムを改変し、1月から3月にかけてRAリーダーシップ養成期間として、20~25時間のトレーニング講座を行っている。主な内容は教授による「リーダーシップ論」、カウンセラーによる「自分の気付き、話の聞き方、相談対応」、看護師による「病気、緊急時対応」、ケーススタディとして「ルームメイトとの問題対応等」、学生が実際に企画を立てる「活動プランニング、企画・運営」などで、実践的なプログラムを実施している。3月の後半は9時から17時まで、事務局学生課とともに新入生受け入れの準備をしておき、共同作業を通してRA同士の結束を強めるとともに、実践の準備期間としている。

RAはボランティアのFloor Representatives(以下FR)とともに、同じフロアに住む約30人の支援を行う(RA1人+FR2人)。RAの役割は寮生の管理、寮生同士の交流促進、寮生のサポートなどである。学生課とRA全員で行うRA会議への参加(週1回)、担当フロアの学生達のフロア会議(適宜)、夜10時以降に交代で見回りをするパトロールなどの役割も担う。こまち寮及び学生宿舍のRAは1年間20万円の予算を運営し、フロアや宿舍のイベン

トなどを積極的に企画し、寮内及び学内居住者との交流を促進している。

2) 立命館アジア太平洋大学

大規模な寮であるため管理・運営は、APハウスでは教職員の他に、RAとよばれる学生組織の協力のもとで行っている。APハウスのRAは64人で、代表1人、副代表2人、棟のリーダー6人を配置している。RAは1つのフロアに2人配置（国内生1人、国際生1人）され、約20人の学生のフロアマネジメントを行っている。RAの選考は教職員の面接で選考され、奨学金は月2万円である。

RAの役割は主にフロアマネジメント（担当フロアの寮生のサポート、交流促進、管理など）と寮全体の管理・交流促進である。寮の運営を行うために、RAは毎週1回のRA会議への参加が義務付けられており、月に1回のフロアミーティングの開催、寮内で行われるイベントの企画、ゴミの分別チェックなどの役割を担う。RA会議などは全て日本語と英語の2言語で行われている。RAの活動を円滑に行うために、RA開始時に1泊2日の合宿を含む約1週間の研修があり、RAの心得、問題への対応の仕方などを学ぶ。寮全体で1セメスターに寮生から集めた約120万円（1人1,000円×1,200名）のイベント資金があり、それをRAが運用し、様々な規模のイベントなどを行い、寮内の交流を促進している。

5. まとめと今後の展望

5.1 「居室と共用部の空間構成」について

第3章の結果から、「居室と共用部の空間構成」には次の特徴があることが明らかになった。第一に、混住寮の居住タイプは、2章でも触れたとおり、個室タイプ、ルームシェアタイプ、ユニットタイプの3種類が主であるが、近年はユニットタイプが主流となっており、1ユニットあたりの人数に幅があることが分かった。ユニットタイプが多くなった要因としては、家庭での個室の一般化などの変化から、個室タイプのニーズが高まっている一方で、教育的効果としては、ルームシェアの方が効果が高いと考えられており、双方の要請の両立を試みていると考えることもできる。国際教養大学の「こまち寮」は、設立時に従前の北米大学日本校の寮を引き継いだという制約にも起因するが、スペースを他学生とシェアする経験を重要視し、ルームシェアを推奨した運用となっている。立命館アジア太平洋大学のAPハウスは「APハウスII」を建てる際にシェア棟を併設し、引き戸の開閉

により2つの個室をルームシェアタイプに近い形で運用できる住戸が導入されている。国際基督教大学は、「グローバルハウス」でユニットタイプを設置したが、その後建てられた3つの寮（櫛寮など）は造付家具などで独立性を高めたルームシェアタイプに戻している。一般的には、独立性が高い個室タイプのほうが学生には好まれ、共用部の少ないレイアウトのほうが管理に手間がかからないと言われているが、人間関係構築などの教育的効果にも配慮して、居住者間の関わりの多いルームシェアをあえて選択している事例があることが明らかになった。

第二に、居住者間の関わりを促す空間構成上の特徴や工夫についてである。まず、フロアの平面計画としては、中廊下型で住戸（個室）を配置する形式が主流であるが、他には以下の特徴が認められた。九州大学の「ドミトリ-3」では、2つのユニットをつなぐバルコニーが設置されており、居住者間の関わりを拡大しやすいように工夫されている。金沢大学の「先魁」では8人のユニットを集合化し1棟として独立させたタイプを導入しており、これはユニットの独立性を高め、居住者間の関わりを促すことで関係構築を目指した試みと位置づけられる。また、国際基督教大学の「櫛寮」では、「ポッド」呼ばれる7つの個室が取り囲むようにまとまりのある領域として配置された新しいタイプの集合形式が採用されており、これは、居住者の人間関係構築をより重視し、「居住空間のまとまり」や「集まる場の位置関係や相互作用」を考慮した空間構成が試みられた事例として位置づけられる。

5.2 「RAなどを活用した運営上の工夫」について

第4章の結果から、「RAなどを活用した運営上の工夫」について、次のような論点や課題が明らかになった。

近年では、混住寮を単なる居住空間ではなく、大学における学びの場の1つとして位置づける潮流が生まれている。この観点からは、単に居住空間の提供に留まらず、寮で得られる学生の経験や学びの質が重要となり、それらを如何に効果的に創出するのが計画・運用上の要点となる。従って、教育寮として管理・運営するためには、まずは寮を担当する教職員が専門性を高め、その目標を明確にして、適切な教育的関与を行うことができる体制を整える必要がある。加えて、学びの場として機能させるためには、「多様な言語・文化背景を持つ他者との関係構築の場」、「意義のある体験や学びが得られる良好なコミュニティの形成の場」となることも重要となる。そのためには、居住者の人間関係構築を促進し、寮内のコミ

コミュニティを支える空間が用意されていることに加えて、運営上の工夫が重要となり、その面では学生相互の交流を生み出し、寮の管理・運営に参画する RA が非常に重要な役割を担っていると考えられる。今回、2校の事例を調査したが、その調査結果からも、RAによる運営や活動の質を高めるためには、RAの選考方法の工夫や、研修やサポートの充実が欠かせないと考えられる。また、RAの運営や活動が自律的に継続できるようにするためには、RA同士・RAと寮生の対話の場や省察の場の設定、交流活動のための資金提供などを適切に行なっていく必要がある。従って、効果的な混住寮の管理・運営を行なうためには、このような教育的関与のあり方について議論を進める必要があり、より体系化した計画論・運営方法論の構築が不可欠である。

このように、寮における教育の質を高めることが求められる一方で、大学の国際化に向けた施策として今後多くの混住寮が設置されていくことを考えると、大学側の負担が過大とならぬように管理・運営できる体制や方法の構築も必要である。その観点から考えると、手間がかからず管理がしやすい寮であるという指標も同時に重要である。ただし、前述のように混住寮における管理・運営は、それ自体が学生の学びの質につながることもあり、「学びの質を高めること」と「手間がかからず管理がしやすいこと」がトレードオフの構図に短絡せぬよう、双方を高次元で両立するため議論を進める必要がある。この点では複数の世代の寮をもつ大学における、寮の計画・運営両面での進化の過程から学べる点が多くあると考えられる。

5.3 今後の展望

上記の考察をふまえると、大学における学びの場の1つである混住寮のあり方を考えるためには、今後は「教育・学び」と「管理・運営」の2つの観点を視野に入れ、これらを高い次元で両立させるための混住寮の建築計画のあり方、RAの導入も含めた管理・運営のあり方をさらに研究していくことが重要である。また、近年は、海外でも教育寮が注目を集めており、特に、2010年度以降、韓国、シンガポール、台湾、香港、マカオなどのアジアのトップ大学では、Residential college (独自の教育プログラムを提供する学生寮)が導入されるなど、新しい教育環境への改革的変化の潮流が明らかになっている。よって、今後はこれらの海外の事例も参考に、混住寮の建築計画のあり方、RAの導入も含めた管理・運営のあり

方を研究するとともに、混住寮の教育効果や寮生の学びの質を検証・評価する方法を開発することが求められる。

※本研究は2014年度明治大学新領域創成型研究「グローバル化時代の国際学生宿舎の計画および運営に関する研究」による助成、および2014年度明治大学大学院研究調査プログラム助成「留学生と日本人学生の生活場面における学び—寮生活を中心に—」を受けて行なわれた。

注1) 表3の作成に当たって以下の文献・資料等を合わせて参照した。平面プランは以下に掲載されている図版を引用・加工して、同スケールとなるよう作成したが、作図上の制約による誤差を含むものである。外観写真は全て筆者の撮影による。

九州大学：<http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/supportcenter/housing/dormitory3>

早稲田大学：中野国際コミュニティプラザ・パンフレット

金沢大学：見学時配布資料、金沢大学国際機構支援室／学生部学生支援課、2015.2.

国際教養大学：<http://web.aiu.ac.jp/campuslife/dormitory/>

国際基督教大学：2015年度教養学部学生寮案内、国際基督教大学ハウジングオフィス、2015.1

芝浦工業大学：国際学生寮・パンフレット

立命館アジア太平洋大学：JAFSA-KAIE Seminar 2014 in Tokyo 資料集、JAFSA、2014.12.1

注2) 複数の寮を視察した大学に関しては、平面プランと外観写真は設置年が新しいものを記載している。

注3) 1階は2つのユニットのみ設置。

注4) 7事例を網羅するため、表3は見開き2ページの構成としている。

参考文献：

文1) リクルートカレッジメント(2013)「特集 寮内留学」『リクルートカレッジマネジメント』第183号、p.4-32

文2) 鈴木在乃(2010)「日本の大学における留学生宿舎提供の現状と課題」『学術講演梗概集』、F-1都市計画、建築経済・住宅問題、p.1521-1522

文3) 仲摩純吾、坂井 猛、鶴崎 直樹、趙 世晨(2014)「外国人学生居住施設の整備実態とその国際交流拠点としての可能性に関する研究—国際化拠点整備事業(G30)採択大学を対象として」『学術講演梗概集』都市計画、p.193-196

文4) 横田雅弘、田中共子(1992)「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク—居住形態(留学生会館・寮・アパート)による比較—」『学生相談研究』、第13巻第1号、p.1-8

文5) 出口朋美、八島智子(2008)「実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係」『多文化関係学』、Vol.5、p.33-47

文6) 山川史(2013)「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』、第38号、p.100-115

文7) 正宗 鈴香(2015)「グローバル人材の育成を意識した国際寮の活用—国際寮の社会的機能から導かれる寮教育—」ウェブマガジン『留学交流』、9月号

文8) 中村展洋、伊藤 昭、今村正治、小野敏子(2006)「立命館アジア太平洋大学における国際学生寮の教育的効果とレジデントアシスタント養成プログラムの開発について」『大学共生研究』1、p.139-151

文9) 吉田千春(2016)「混住寮の生活では何が学ばれているのか—レジデント・アシスタントの語りを中心に—」『国際日本学研究論集』、明治大学大学院、第4号、p.1-16